紫上の継母物語をめぐって

北京外国語大学 張龍妹

『古事記』『日本書紀』にみえる神または古代帝王をめぐる嫉妬物語では、皇后である女性があらわに嫉妬の感情を表現することができ、王たる者はそれを素直に受け止めている。それには折口信夫が言われる古代帝王の「色好み」の美德が体现されていると思われる。『大和物語』にも女性の嫉妬に対して寛容であり、道綱母が町小路女に対する赤裸々な嫉妬ないし憎悪を『蜻蛉日記』に書きつづつてもいる。

しかし、『宇津保物語』に嫉妬しない俊蔭の娘が現れ、『源氏物語』になると、「雨夜品定」では、男性一方的な嫉妬論が語られる。そして、紫上と光源氏の関係において、常に紫上の嫉妬が難点とされるようになる。そのような紫上の嫉妬が、明石姫君を引き取ることで緩和され、姫君を愛育する理想的な継母として、光源氏の妻の座に安定したかにみえる。ところが、のちの朝顔求婚事件、女三宮降嫁事件などを経て、社会的に孤立無援の紫の上は、たとえずでに女御となった明石姫君が彼女をまことの御親ともてなすにしても、やはり出家を願わずにはいられない。そのような紫の上の内面に則した描写は、「雨夜品定」に語られる男性一方的な嫉妬論とは背反するものである。

中国では、嫉妬しない、そして他腹の子供をも愛育することのできる女性を理想的とする。それに、古代中国の女性は自らの内面を表現する散文作品は殆どなく、そのような女性像を語る作品は、男性一方的に女性を訓戒するものや、女性が男性の立場に立って書かれた女訓書の類が残っているばかりである。

本発表では、嫉妬、継母など古代女性の理想性にかかわる内容に注目し、紫上の人物像の変容を通して、紫の上の内面に密接した描写の可能性と書き手の問題について考えたい。